

## 癒やしの森へ

グラス片手に苔を愛でる。みずみずしい緑色には、キリッとした白ワインや日本酒が合う。じつとりと濃い抹茶色なら、しつかりした赤ワインもいい。

苔にハマったきっかけは、会社帰りに偶然見つけた心齋橋筋商店街の近くにある『K』。苔がメインの観賞用植物店だ。地球から分けてもらった自然で、ストレスと戦う現代人を癒やしたいという。手のひらサイズの商品が多いのは、オフィスにも

持っていきやすくするためだ。

「くさいっ!」。店のドアを開けると、むわっと湿気が迫ってくる。土っぽくて磯っぽい臭い。だけど、何だか落ち着く。子供の頃、校庭や河原の土を素手で掘った記憶がよみがえる。

枝ぶりの立派な松、紅葉した南天、モジャモジャと茂るシダ。ずらっと並んだ鉢植えや盆栽には、苔が厚く敷かれていてふかふかと存在感を放っている。店の奥には、まるで沢の

一部を切り取ってきたような展示台。サラサラと流れる水に置かれた石や流木に、苔や植物が生えてより自然な姿を楽しめる。

目を引くのは苔玉（植物の根を土で丸く包み、まわりに苔を貼りつけたもの）。ころんとしたシルエツトがおはぎのようで愛らしい。もふもふとした感触に、思わず頬を当てたくなる。ぐっと顔を近づけると、髪の毛より細い茎に1ミリに満たないチリチリとした葉がたくさんついている。枯れかかった茶色い葉もあれば、青々しい新芽もあって、小さくてもちゃんと植物なんだと感心する。苔は乾いていると黄色がかったあざやかな緑だが、水に濡れると上品な濃い抹茶のような色になる。水を

含み、ぬめぬめと光を反射する様子は官能的でつい魅入ってしまう。

「濡れている方がいいですね。でも水をやり過ぎると甘えた伸び方をするんです」

女性店員のHさんが解説をしてくれる。見比べると、荒々しく伸びた苔もあれば、きめ細かく生え揃った苔もある。水のやり方だけで、こんなに違いが生まれるんだ。

「このもみじは、切った枝を苔に置いていただけで勝手に育ちました」たしかに、石と苔だけなのにちゃんと生えている。不思議な力を深く感じる。

お店のオープンから6年以上も苔の世話をしてきたHさん。苔に日光を満遍なく当てるため、閉店後は毎

日50個ほどある商品を移動させる。季節の変わり目には店に泊まり、朝陽の角度までチェックするそうだ。私が育てている苔のこともいつも気にかけてくれる。

自宅のマンションの一室でじつと苔を見ていると、いつの間にか私が小さくなってその上に立っている。苔の絨毯があたり一面にひろがる森。陽を浴びて、目に痛いほどの緑。しんとした静寂の中、深呼吸をするとひんやりとした空気が肺を満たす。心がすーっと軽くなる。しばらくしてぼーっとした錯覚から醒めると、頭が空っぽでスッキリ。

小さな森にトリップする。この気持ちよさがやめられない。



じつと苔を眺めると、その先に森が広がる